



居場所概念の普及およびその研究と課題

石本, 雄真

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1):93-100

(Issue Date)

2009-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001689>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001689>



居場所概念の普及およびその研究と課題

Spread of Various Concepts about Ibasho (Psychological space we do not have rootless feeling) and Current Status of Ibasho Research and its Problems

石本 雄真*

Yuma ISHIMOTO *

要約：本研究は居場所概念がどのように普及してきたか、および居場所に関する論考や研究の概観を行ったうえで、それに基づき居場所をどのように実践に活かすことができるのかについて検討したものである。まず、居場所という言葉が現在のように一般に広く普及する過程、および心理学関連分野における居場所研究について概観した。居場所に関する心理学的考察では、居場所を他者とのつながりを示す関係性として捉えるものが中心であった。居場所の分類についての考察では、主に社会的居場所と個人的居場所に分類されることが明らかになった。さらに、居場所という観点から捉えられた臨床事例、および居場所に関する実証的研究について概観し、調査対象者が思い描く居場所像の多様性が自由記述を用いた研究においても尺度を用いた研究においても課題となっている様子を示した。最後に不登校、心理臨床との関連からみる居場所について検討し、それらの分野では居場所が「ありのままにいられる」と「役に立っていると思える」という2つのキーワードで捉えられていることが示された。今後の課題として、居場所感や「居場所がない」といった感覚に結びつく要因を明らかにすることの必要性が挙げられた。

キーワード：居場所、心の居場所、不登校

1. はじめに

2004年長崎県佐世保市で起きた小6女児同級生殺害事件について、家庭裁判所は決定要旨で「交換ノートやインターネットが唯一安心して自己を表現し、存在感を確認できる『居場所』になっていた」とし、被害女児がその居場所へ侵入したことが殺意に結びついたと事件背景を考察している。その決定要旨を受けて、朝日新聞の天声人語（朝日新聞社、2004a）は「人は、それぞれの心の居場所を探している。しかし、それを見つけるのは容易ではない」と記し、居場所の重要性とそれを確保することの難しさを強調した。家裁の最終審判では居場所がないことや、居場所を脅かされることが、人の生死にさえ影響を与えるという認識が示されており（中西、2005）、居場所の重要性が一般的に認識されていることが表れている。

「居場所」という言葉は本来「居る場所」を表す言葉であり、現在でも辞書（広辞苑、1998）では「いるところ、いどころ」という意味が示されているのみであるが、上記のように用いられる「居場所」という言葉は「心の居場所」と表現されるように、物理的な場所ではなく、心理的概念を指し示している。現在ではこのような心理的な意味をもつ居場所という言葉は一般的に用いられており、心

理学においても心理的な居場所についての議論が多くなされている。しかしながら、一般的に用いられる場合においても心理学で用いられる場合においても、その意味が明確にされて用いられているわけではなく、居場所の概念について十分な共通理解が得られていないわけではない。上述したように現在では、居場所はその重要性が認識され、教育や心理学の分野においても適応的な効果が期待されているものである。さらには、多くの「居場所づくり」の実践も行われている。しかしそのような実践においても、居場所について明確な定義づけがなされているわけではなく、どのような実践が居場所に結びつき、適応的な効果に結びつくのかといったことは手探りの状況であるといえる。

これらのことから本稿では、居場所という言葉が現在のように広く普及してきた過程を概観し、実践に資するような居場所研究を今後行う上での課題について検討することを目的とする。

2. 一般的に使用される言葉としての居場所

居場所という言葉の拡がりには新聞紙面上に見ることができる。朝日新聞紙面での「居場所」や「居場所がない」といった表現の使

* 神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 / 伊丹市立総合教育センター 適応教室やまびこ館

(2009年4月1日 受付)
(2009年9月1日 受理)

用頻度の推移をみると1994年までと1995年以降との間で大きな上昇がみられる¹⁾(Figure1)。この使用頻度の上昇は、文部省の出した報告書による影響が大きい。文部省は1992年に不登校に関する報告書を出し、その中で学校が「心の居場所」の役割を果たす必要性を提唱した(文部省初等中等教育局, 1992)。新聞紙面にも表れているように、文部省の報告書以降、「居場所」や「居場所がない」といった表現の使用数が急激に増加した。

では、それ以前、心理的な居場所という言葉はどのように用いられてきたのであろうか。居場所という言葉が心理的な意味で用いられ始めたきっかけについて、「東京シューレ」が挙げられることが多い(芹沢, 2000; 住田, 2003など)。東京シューレは1985年に不登校の子どもの親たちがつくった、学校以外の行き場としての居場所である(奥地, 2006)。1980年代半ば、居場所といえば、東京シューレのような学校に行けない子どもたちのフリースペースやフリースクールをさしており、居場所は学校以外の行き場として注目されるようになった(萩原, 2001)。この時点では「学校外に行き場」という空間的な意味が大きく、居場所づくりとは実際に空間を用意することを伴うものであった。しかし空間的な意味だけでは、学校に行けなくとも家という場所があるといえるが、不登校児童生徒にとって学校のある時間帯の家は本来居るべきではなく、居るはずのないところであることから(住田, 2004)、家は心理的には居心地の良いところにはならない。その意味において、フリースペースやフリースクールといった居場所も大いに心理的な意味を持ち合わせており、この頃から心理的な意味で居場所という言葉が用いられ始めたといえる。

文部省の報告書では、学校が「児童生徒にとって自己の存在を実感できる精神的に安心していることのできる場所」である「心の居

場所」としての役割を果たす必要があると述べられている(文部省初等中等教育局, 1992)。文部省の求める取り組みは、居場所がない子どもたちに、居場所となるような空間を用意するというのではなく、すでに存在している学校という物理的な場所・空間が居場所となることを求めるものである。この報告書では居場所という言葉に「心の」という言葉がつけられているように、それまでいわれてきた居場所よりも、より一層心理的な意味を強調したものになっているといえる。一方、この報告以降自治体の設置する適応指導教室も増加しており(河本, 2002)、兵庫県では1994年からの設置検討の末、不登校児を受け入れる短期宿泊体験施設として県立但馬やまびこの郷が1996年に設置されるなど、空間としての居場所の増加も顕著になった。

上述したように、文部省の報告書以降は新聞紙面においても居場所という言葉が用いられることが多くなっており、居場所に関する書籍も多く出版されるようになった(田中, 2006)。居場所という言葉の出現頻度の増加とともに、その意味についても拡大しており、現在では「安らげる場所」といったものから「自由な時間」(野村, 2002)、「日常から離れられる場所」(大岡, 2002; 諏訪園, 2002)、「たまり場」(内藤, 2008)、そのほか「仕事と家庭以外の場所・時間」、「生き生きとすごせる場所・時間」等々、一般的には概ね快感情を伴う場所、時間、人間関係等を指して用いられているといえる。

3. 居場所に関連する論考や研究

文部省の報告書以前は、不登校関連、心理学関連分野における居場所への言及はほとんどみられず、東京シューレのようなフリースペースに不登校の子どもが通った親の報告(松浦, 1987)や、フリー

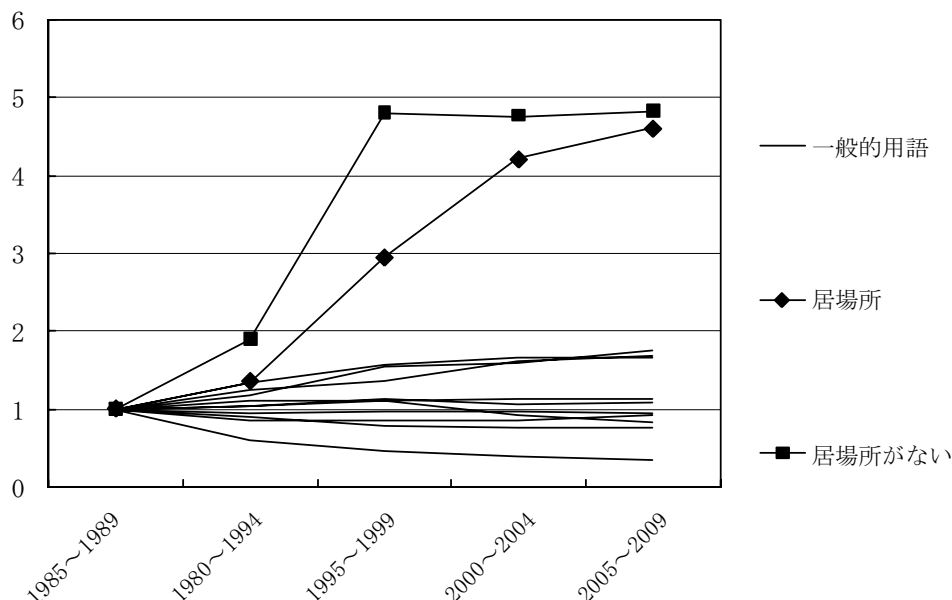


Figure1 新聞紙面における「居場所」, 「居場所がない」という言葉の出現数の推移

1) 「朝日新聞オンライン記事データベース聞蔵IIビジュアル」を用いて検索。2009年3月18日までの記事が対象。年によって収録している記事数が異なるため、他の一般的な用語との比較で検討した。他の一般的な用語の期間別出現数平均値で「居場所」「居場所がない」その他の一般的な用語の期間別出現数を除し、その上で各用語について1985年～1989年を1としたときの相対的な比率を示した。一般的な用語は、生活、交通、国会、病気、場所、天気、円、学校、日本、心の10個の単語を用いた。なお、2005年～2009年の期間については、2009年が3ヶ月分しか対象とされていないため、参考の値となる。

スペースの活動報告（大沢，1991）がみられるのみであるが，文部省の報告書以降，徐々に居場所に関連する論考や研究，居場所という言葉を用いた実践報告がみられるようになる。報告書以降は居場所に関する言及が増えただけではなく，居場所問題が論じられるフィールド，居場所という言葉の表わす意味，居場所問題が対象とする年齢についてそれぞれ拡がりが見られるようになった。

文部省の報告書以降，フリースクールやフリースペースにおける現場報告だけでなく，居場所がどうあるべきかということについて客観的に捉えた論考が徐々にみられるようになった。それらは梶原（1993）によるものや難波（1993）によるもの，小野（1994）によるものなど，現場での経験に基づきつつも客観的に居場所のあるべき姿について論じたものであり，居場所が学術的に論じられ始める初期のものであるといえる。このような現場レベルの論考に続き，教育学的視点による論考（吉本・深澤，1995；山本，1996a，1996b，1996c，1997）がみられるようになった。心理学的視点での論考は北山（1992）によるものがあるほかは90年代の後半になるまでみられず，やや遅れて始まったといえる。そのほか，2001年には建築雑誌が子どもの居場所を特集するなど（日本建築学会，2001），建築分野における論考もみられるようになった（例えば，鈴木・中野，2000；木下・池谷・今井，2008；木下・矢部・今井，2008）。

居場所が客観的に論じられるようになるにつれて，居場所という言葉の表わす内容についても拡がりが見られるようになった。上述したように，文部省の報告書以前，居場所といえばフリースクールやフリースペースを指しており，それらは心理的な意味を帯びつつも物理的な空間を伴う居場所であった。しかし，報告書以降，居場所が必ずしも物理的空間を伴わない形で捉えられるようになってきた（例えば，梶原，1993；小野，1994）。また，学校外の空間を表していた居場所という言葉が，学校を居場所にするとした観点で用いられるようになったのも，文部省の報告書以降のことである（例えば，梶原，1993）。一方，居場所という言葉は不登校問題に関連して用いられてきた経緯から，小中学生の不登校児童生徒の問題に関連して用いられることが多かったが，不登校児童生徒に限らず子どもの居場所が減少しているとした中島（1993）の論考を始め，吉本・深澤（1995），山本（1996a，1996b，1996c，1997）の論考においても，不登校児童生徒の問題としてではなく，学校全体，子ども全体の問題として居場所が論じられるようになった。さらに，居場所に関する議論が義務教育期間内の問題にとどまっていることに疑問を呈し，大学生の居場所に関する自由記述から居場所とは何なのかということについて考察した萩原（1997）や，中高年脳卒中患者における居場所と障害受容，リハビリ意欲との関連を検討した中原（1998）をはじめ，1998年には青年心理学会が「青年心理学から見た『居場所』の問題」といったテーマセッション（小沢，1998；白井，1998a；都筑，1998a，1998b）を催すなど小中学生にとどまらず，他の年代においても居場所に関する議論がなされるようになった。その後，乳幼児（柴崎，2003）や高齢者（三本松，2000）に関する議論においても居場所という言葉が用いられるようになっており，1990年代半ば以降，居場所は不登校問題という枠と小中学生という枠を超え，一般的な問題を表す言葉として共有されるようになったといえよう。

4. 心理学および関連分野における居場所研究

次に，心理学および関連分野における研究について概観する。上述したように心理学分野における居場所の論考は，1990年代の後半からみられるようになった。心理学および関連分野における居場所に関する研究は，大きく3つに分けることができると考えられる。1つ目は心理学的立場から居場所について考察したものが挙げられる。これらは主に1990年代後半から2000年代前半まで多くみられた。2つ目は臨床事例や居場所づくり実践について，居場所という観点から捉えたものが挙げられる。これらは2000年代前半に多くみられた。3つ目は居場所に関する実証的研究である。これらは主に2000年以降急激に増加したものである。このように心理学分野においては，まず心理学的立場で居場所を捉える試みから始まり，徐々に臨床研究，実証研究へと拡大していった様子が見られる。

i) 居場所に関する心理学的考察

居場所の内容についての考察

最も初期に心理学的立場から居場所に言及した北山（1992）は居場所を「自分」が成立するための外的要因であり，内的要因としての中身と，それらを入れる器が「自分」の構成要素であるとし，それらが欠落すると「自分がない」という状態に陥るとした。中でも，思春期はそれらの三要素に変動が起きる時期であるとし，居場所が急激に失われやすい時期であると述べている。ここでの居場所は，「身の置き場」と表現されているものの，物理的空間というよりは社会的な位置づけとしての「身の置き場」として捉えられており，大いに心理的要素を含むものであると考えられる。同様の視点として山本（1996a，1996b，1996c，1997）は，物理的空間の確保のほかに集団の中に自分の位置があることを実感することが居場所を得ることに結びつくという上野（1989）の考えに基づき，居場所を「社会的意味合いを帯びた物理的身体の居場所」とであると捉えている。都筑（1998a）も，北山（1993）の考察や実践現場での報告をもとに，居場所は物理的な場所と安心した心理状態の両方を含んだものであり，そこでは他者とのつながりが存在しているとしており，これらの考察では居場所が物理的側面と心理的側面の両側面を備えるということのほか，社会的な位置づけが居場所に結びつくという指摘が共通して述べられている。このように，社会的な位置づけ，つながり，関係性を居場所の重要な要素として指摘するものはこのほかにも数多くみられる。例えば萩原（1997）は，大学生の居場所の体験に関するレポートから，「居場所がない」という感覚に着目して居場所の定義を行い，「『居場所』とは『私』とひと・もの・こととの相互規定的な意味と価値と方向の生成によってもたらされる『私』という位置である」としている。萩原（1997）は居場所が関係性を前提にするものであるとしており，同様の指摘は竹森（1999），安齊（2003），住田（2004），萩原（2004），岩川（2006）にもみられる。そのほか，増山（1999）のように，関係性を居場所の要素のひとつとしてとらえる見方もみられる。また，田中（2002）は居場所を関係性の中で自分の位置と将来の方向性をその時々で確認できる場としており，関係性からうまれる社会的な位置づけについても居場所の要件としている。同様に萩原（2002）は，居場所とはこの世界での自分の存在意味や存在価値であると同時に，世界の中での自分

という位置を示すものであるとしている。このような社会的位置づけはアイデンティティの概念を彷彿させるものであるが、実際に居場所とアイデンティティとの関連を指摘するものもいくつかみられる(小沢, 1998, 2002, 2003; 白井, 1998a; 岩川, 2006)。このように、心理学における居場所についての考察は、居場所を他者とのつながりとしての関係性であると捉えるものが中心であり、さらには関係性から生まれる社会的な位置づけをも含むものがみられる。

居場所の分類についての考察

居場所の分類を試みる研究もいくつかみられる。「社会的居場所」、「人間的居場所」、「匿名的居場所」に分類した藤竹(2000)や、「個人的居場所」と「社会的居場所」に分類した中島・倉田(2004)、「私的居場所」と「公的居場所」に分類した中島(2003)、「他者と一緒にいる場合の居場所」と「一人でいる場合の居場所」に分類した岸田(2005)などが挙げられる。このような分類を概観すると、一人でいる居場所(以下、個人的居場所)と他者と一緒にいる居場所(以下、社会的居場所)という分類に関しては一定の共通性があると考えられる。

個人的居場所と社会的居場所について考えるとき、一人でいて居場所を感じるということと他者という居場所を感じるということでは、その意味するところが異なることが想像できる。また、個人的居場所については否定的な影響を指摘するものがみられる。例えば若山(2001)は、個人的居場所は安心感を得られるという意義が大きいことは間違いないが、それは「ひきこもり」の舞台になると指摘しており、山岡(2002)も他者との関係性から切り離されたところに居場所を求める心性の裏には、心理的問題が潜んでいることも考えられるとしている。さらに、上述したように居場所についての考察では、関係性が居場所の基底的要素であるという指摘が多くみられる。このような立場に立てば、「関係性」の存在しない個人的居場所というものそもそも居場所ではないということになる。実際に社会的居場所と個人的居場所を区別し、心理的適応との関連を検討した研究(石本, 2006)では、社会的居場所と心理的適応との関連は確認されたものの、個人的居場所と心理的適応との関連は示されておらず、心理的適応との関連という視点からはそれらは明確に区別できるものであると考えられる。

このように個人的居場所については、心理的問題との関連の指摘や居場所に関する考察との不一致がみられるが、一方で現在においては「居場所」という言葉から「一人でいる場所」が連想される(中村, 1998; 堤, 2002)ことや、実際に「一人でいる場所」を居場所だと感じている人がいること(小畑・伊藤, 2001)、泊・吉田(1999)のプライベート空間の研究において、一人で専有できる空間は緊張解消、課題への集中、自己内省の効果があるとされていることから、個人的居場所は社会的居場所とは異なるものの、有効な機能を持つ可能性が考えられる。今後は、個人的居場所がもつ適応的な影響について研究する必要があるといえよう。

ii) 居場所から捉える臨床事例

鈴木(2003)は、スクールカウンセラーとして非行グループに対する介入を行った報告を通して、相談室をどのように居場所としていくのかについての考察を行っている。そこでは、相談室が「感情表現の場」となるようにし、それらの感情をカウンセラーがあるが

ままに受容的に受け入れることで、非行グループにいた生徒が自尊心、自己肯定感を回復していく過程が報告されている。物理的な空間である相談室が心理的な居場所としての意味づけをもつ過程が示されており、ここでも物理的空間に加えて心理的な要素が居場所と捉えられている。このように何らかの不適応を示す児童生徒に対して、居場所を用意することで適応を促すといった対応を報告するものはほかにも本間(2001)による適応指導教室の報告等がみられる。他方、矢幡(2003)は心理的居場所という観点から、クライアントの制作したコラージュや面接内容を解釈し、安心できる安全な居場所を見出すことと並行して快復へ向かった事例について報告している。このように援助者の側が居場所を提供するという立場ではなく、居場所という概念を用いて事例を解釈するものもいくつかみられる。居場所探しという観点から事例を解釈したものでは、児童養護施設の子どもの事例を報告している国分(2003)や不登校生徒の事例を報告している徳田(2004)、橋本(2007)が、居場所のなさという観点から非行事例を解釈したものは廣井(2000)が挙げられる。これらの研究では心理的居場所がどのようなものなのかについては明確に示されていないことが多いが、身体的、精神的に安全が確保される空間や人間関係のことを指し示しているものが多い。

iii) 居場所に関する実証的研究

居場所に関する実証研究は、居場所がどのように捉えられているのかを検討するために、自由記述法を用いて居場所の内容や連想するものを問うているもの、尺度を作成し居場所感を測定するもの、その両者を行うものに大別できる。

自由記述法を用いた居場所研究

居場所の内容を尋ねる研究ではそれぞれ質問の方法が異なり、単純に比較することはできないが、いずれも居場所として家や自分の部屋が多く挙げられることが多い(白井, 1998b; 中村, 1998, 1999; 小畑・伊藤, 2001; 堤, 2002; 山岡, 2002)。これらの研究の多くは大学生や専門学校生といった青年期を対象として調査を行ったものであるが、杉本・庄司(2006)が尺度作成のための予備調査で、小・中・高校生に対して「あなたにとって一番の『居場所』はどこですか?」という質問を行ったものでも、小・中・高校生のすべてにおいて自分の部屋、自分の家、学校が多く挙げられるという結果を得ており、少なくとも小学生から大学生年齢までの間では居場所といえば家や自分の部屋を指すものであるといえる。青年期を対象とした研究においては、家や自分の部屋のほか、友人や家族が多く挙げられており(白井, 1998b; 中村, 1998; 小畑・伊藤, 2001; 堤, 2002; 山岡, 2002)、物理的な空間のほかに他者との関係性についても居場所と捉えられていることがわかる。一方、杉本・庄司(2006)の研究では、少なくとも上位3つにはそのような関係性が挙げられておらず、高校生まででは、居場所といえば字義通りの「場所」を指すものであることが予想される。

上述したように、現在では居場所という言葉は一般的に用いられるようになってきているものの、その一方で明確な定義づけがなされずに用いられている言葉でもある。このことから、一般的に心理的な意味をもって用いられているとはいえ、いざ居場所の内容を問われると意味が明白である物理的な空間を挙げるのが多くなるのであ

ろう。しかし、同時に友人や家族も多く挙げられており、居場所に関する論考で指摘される関係性についても、一般に居場所と認識されていることが分かる。

尺度を用いた居場所研究

中西（2000）は、大学生に対する予備調査の結果「安心感」、「受容感」、「役割感」が安定した居場所感の下位概念であることが確認できたとし、それに基づき、幼児をもつ30代前半の男女に調査を行い、それら3つの因子からなる居場所感尺度を構成している。秦（2000）も同様に、高校生に対する調査から、「安心感」、「受容感」、「役割感」の3つの因子からなる居場所感尺度を構成している。その上で秦（2000）は不登校経験のある生徒とない生徒の得点を比較し、家族における居場所感についても学校における居場所感についても不登校経験のない生徒の方が高いことを示している。同様のアプローチのものはこのほかにもいくつかみられる。大久保・青柳（2002）は、中学生・高校生・大学生を対象にした調査から、「居心地の良さの感覚」、「課題・目的の存在」、「被信感・受容感」、「劣等感のなさ」の4因子からなる居場所感尺度を構成している。則定（2008a）は「安心感」、「被受容感」、「本来感」、「役割感」の4つの因子からなる心理的居場所感尺度を構成している。則定（2008a）の尺度は「〇〇と一緒にいると、ホッとする」など、他者との関係を前提とした項目で構成される尺度である。心理学分野での居場所に関する考察で、関係性が重視されていたことから、このような視点での尺度は重要であると考えられる。しかしながらこれらの研究は“居場所感”の測定を試みるものであるが、“居場所にいることで得られる感覚”と“居場所となるために必要な感覚”の区別がなされておらず、測定されている感覚が何を示しているのかが明確ではない。

これに対して、居場所の条件や機能、特徴、感情を対象を絞った尺度を構成しているものもいくつかみられる。山岡（2002）は、白井（1998a, 1998b）の作成した居場所条件尺度を元に項目を追加し、「基本的信頼感」、「対象共有」、「受容される感覚」、「一人になれる場所」、「自由で安心できる場」、「すがりつき」の6つの因子からなる居場所条件尺度を新たに構成している。この尺度は、居場所があるという感覚を測定するものではなく、ある居場所について、それがどのような特徴をもつのかについて測定するものである。田中（2002）は多面的感情状態尺度（寺崎・岸本・古賀、1992）や一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木、2000）の項目を用いて「安堵感」、「充実感」、「否定的感情」からなる居場所感情尺度を作成した。この尺度は「居場所」にいるときにどのような感情を感じるのかを測定するものである。田中・田嶋（2004）は、中学生に対する調査から、次元性の居場所感尺度を構成した。さらに、居場所の特徴を測定する尺度を個人要素と場所要素に分けて検討し、個人要素は「受容・関心」、「充実感」、「共感・連帯感」、「評価のなさ・自然な自分」、「非孤立感」の5因子、場所要素は「なごやかさ」、「明るさ」、「独占感」の3因子からなるものとして構成している。しかし、個人要素と場所要素の差異は明確ではなく、それらを区別することの意義も示されていない。また、杉本・庄司（2006）は小・中・高校生に対する予備調査で、「そこをどうして『居場所』だと思うのですか？」という質問に対して得られた回答から、「被受容感」、「精神的安定」、「行動の自由」、「思考・内省」、「自己肯定感」、「他者からの自由」の6因子からなる「『居場所』の心理的機能を測定する

尺度」を作成している。しかし、居場所であると思う“理由”の記述から居場所の“機能”を測定する尺度項目を作成することには論理的な矛盾があると考えられる。さらに、杉本・庄司（2006）自身、対象者個人の捉え方によって居場所の捉え方が異なるために、研究によって捉えたい居場所を操作的に定義する必要があると述べているにもかかわらず、調査対象者に対して居場所という言葉を用いて尋ねた回答をもとに尺度を作成しており、個人によって異なる居場所概念の問題を克服することができていない。一方、堤（2002）は「居場所がない」という感覚に着目し、「対他的疎外感」、「対自的疎外感」の2因子からなる「居場所がない」感覚尺度を構成している。これら2つの因子は、項目内容を見ると明確な差異はなく、どちらも主に他者との関係性が切断されていることを示す項目からなっているため、因子構成について再検討が必要なものであると考えられるが、この尺度で測定された「居場所がない感覚」は自我同一性の混乱と関連があることが示されており、居場所に関する論考で指摘されている居場所とアイデンティティの関連を支持するものであるといえる。

これら尺度を用いて居場所を捉えようとする研究の問題点として、尺度がどのような居場所を捉えているのかが明確ではないことが共通して挙げられる。このことは、尺度作成の段階において、多くの研究では調査対象者が回答した自由記述を参考にしていないことに起因していると考えられる。居場所が一般的な用語として普及し、様々な用途で用いられている現在においては、調査対象者が思い描く「居場所」像も様々であり、それゆえに各々思い描かれるあらゆる居場所の意味内容に関わる共通項のみを抽出するような尺度となりがちである。今後は調査を行う側が、捉えようとする居場所像を明確にした上での尺度作成が必要とされるであろう。また、尺度を用いて実証的に居場所を捉えようとする試みはまだ萌芽的段階であるといえ、それぞれの尺度同士の関連についての検討や尺度を用いた実践的な研究はみられない。これらについても、今後の課題として挙げられる。

5. 不登校、心理臨床との関連からみる居場所と今後の展望

居場所という言葉が一般的に用いられるようになって15年余りが経つ。急速な言葉の普及の一方で、居場所に関する研究はまだ模索段階であるといえる。フリースクールやフリースペースを指していた居場所という言葉は、現在では多種多様なものを指し示すようになり、居場所の研究は扱う対象ですら十分なコンセンサスが得られていない。しかしながら不登校児童生徒数は増加する一方であり、「居場所がない」子どもは依然多いと考えられる。このことから、居場所についての研究および、それらに基づく実践的援助が急がれているといえる。

実践に還元しうる居場所研究を行うためには実践対象を規定し、研究の対象を絞る必要があると考えられる。このことについて、居場所に関する議論の発端となった不登校問題の場や、同様に居場所がない状態である可能性の高い者を対象とする心理臨床などの分野では、居場所はありのままで見られるところという一定の共通理解が得られつつある。例えば不登校問題の現場においては、居場所として、子どもをありのまま受け入れることが大切であるとい

う指摘がたびたびされている(朝日新聞社, 2000, 2003a, 2003b, 2004b, 2005 など)。最近では, 臨床教育学の分野でも, 居場所は, 自分の気持ちを素直に表現してもそれが否定されないところ, 自分の役割が実感できるために自己肯定感が取り戻せるところ(廣木, 2005)とされている。また, 臨床心理学研究においては, 居場所とはありのまま受け入れられることであると定義するものが多く, 例えば廣井(2000)は, 「居場所がある」ということは, 自分自身でいることが受け入れられていると感じられることであるとしており, 中原(2002)は, 居場所は, 自分がそこにいてもいい場であり, 自分らしくいられる場であり, 自分がありのままにそこにいてもいいと認知し得る感覚であるとしている。また, 「自分の気持ちを素直に表現しても否定されない」ということに加えて, 「自分の役割が実感できる」ということが指摘されている(廣木, 2005)ように, 実際に自分が役に立っていると思えることで, 居場所を得ることができたといった事例(山咲・澤地, 2006;坂本, 1993)や適応に結びついた事例(細見, 2005)はいくつかみられる。さらに, 心理学研究における居場所感の測定を試みる尺度の下位因子には「自分が役に立っていると思える感覚」を含むものが多い(例えば, 中西, 2000;秦, 2000;大久保・青柳, 2002;則定, 2008b)。このように, 不登校問題の現場や心理臨床などの分野では, 居場所が「ありのままに受け入れられる」と「役に立っていると思える」との2つのキーワードで語られることが多い。実際にこれら2つの感覚から居場所を捉え, 心理的適応や学校適応との関連を検討した研究(石本, 2008;中谷, 2008;石本・倉澤, 2008, 2009)では居場所感の高さと, 心理的適応や学校適応の高さについての関連が示されており, これらの感覚に焦点を絞った研究を行うことで心理的適応や学校適応の向上に結びつく実践に還元されうると考えられる。しかし, それらの研究においても居場所感がどのような背景で高まるのか, もしくはどのような要因で「居場所がない」といった感覚をもつようになるのかについては明らかにされておらず, 介入ポイントを示すには至っていない。今後は, 居場所感や「居場所がない」といった感覚に結びつく要因を明らかにすることで, 介入に活かすことのできる知見を得ることが急がれる。

引用文献

安齊智子 2003 「居場所」概念の変遷 発達, 第96号, 33-37.
 朝日新聞社 2000 不登校の子どもたちが集うサークル「ラフ」(リポート山梨) 11月5日朝刊
 朝日新聞社 2003a 不登校:3 居心地のよい場所必要(ゆらぐ教育) 10月18日朝刊
 朝日新聞社 2003b 居場所「ありのまま」受け入れて(コドモたちはどこにいる?) 7月23日朝刊
 朝日新聞社 2004a 居場所(天声人語) 9月17日朝刊
 朝日新聞社 2004b 自分嫌い 劣等感, 居場所がない(10代の入り口で:中) 7月16日朝刊
 朝日新聞社 2005 6時間 傷とともに進もう 2月27日朝刊
 藤竹 暁 2000 居場所を考える(現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ3—現代人の居場所—) 至文堂 Pp.47-57.
 萩原建次郎 1997 若者にとっての「居場所」の意味 日本社会教

育学会紀要, 33, 37-44.
 萩原建次郎 2001 子ども・若者の居場所の条件 田中治彦(編) 子ども若者の居場所の構想 学陽書房 51-65.
 萩原建次郎 2002 子ども・若者の居場所空間とデザインの方法 日本の社会教育, 46, 117-129.
 萩原建次郎 2004 居場所が生まれる場を構想する 青少年問題, 51, 16-21.
 秦 彩子 2000 「心の居場所」と不登校の関連について 臨床教育心理学研究, 26(1), 97-106.
 橋本有紀 2007 適応指導教室で居場所を見つけた中学生不登校女子の一事例 駒沢大学心理臨床研究, 6, 13-18.
 廣井いずみ 2000 「居場所」という視点からの非行事例理解 心理臨床学研究, 18, 129-138.
 廣木克行 2005 臨床教育(Clinical Education)—子どもの居場所をつくる—(神戸大学発達科学部編集委員会 編 キーワード人間と発達) 大学教育出版 106-107.
 本間友巳 2001 事例から見た適応指導教室の分析 京都教育大学教育実践研究紀要, 1, 33-43.
 細見多恵子 2005 不登校を生まないための予防・開発的な支援づくり——児童生徒の学校生活における内面と投稿回避行動との関連から 研究紀要(兵庫県立但馬やまびこの郷), 8, 66-75.
 石本雄真 2006 個人的居場所と社会的居場所の機能の違い—心理的 well-being との関連を通して 発達・臨床心理学研究(神戸大学発達科学部発達基礎論講座・発達臨床論講座), 5, 61-69.
 石本雄真 2008 関係性ごとの居場所感が精神的健康および学校適応に与える影響 日本発達心理学会第19回大会論文集, 736.
 石本雄真・倉澤知子 2008 心の居場所と大学生のアパシー傾向との関連 日本青年心理学会第16回大会発表論文集
 石本雄真・倉澤知子 2009 心の居場所と大学生のアパシー傾向との関連 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(2)
 岩川直樹 2006 居場所という原点—目的志向の活動から存在志向の場づくりへ— 子どもの権利研究, 8, 4-9.
 梶原康史 1993 「心の居場所」論が登校拒否を減らせるか 児童心理, 47(8), 830-834.
 河本 肇 2002 適応指導教室の目的と援助活動に関する指導員の意識 カウンセリング研究, 35, 97-104.
 木下誠一・池谷辰仁・今井正次 2008 中高生の「居場所」の成立条件に関する研究—三重県における居場所づくり事例の分析を通して— 日本建築学会計画系論文集, 73, 39-46.
 木下誠一・矢部亮・今井正次 2008 居場所としての地域公共施設のあり方に関する研究—三重県における居場所選択特性と地域差— 日本建築学会計画系論文集, 73, 1205-1212.
 北山 修 1992 移行期としての思春期—自分をかたちづくる年頃ころの科学, 44, 38-43.
 北山 修 1993 自分と居場所 岩崎学術出版社
 岸田浩子 2005 青年期前期の居場所感と一人でいられる能力の関連性について 関西地区青年心理学研究会発表資料
 小畑豊美・伊藤義美 2001 青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類— 情報文化研究, 14, 59-73.
 国分美希 2003 こころの居場所を求め, 自傷を繰り返す子ども

- への援助を通して 大正大学カウンセリング研究所紀要, **26**, 4-12.
- 広辞苑 1998 居場所 岩波書店
- 増山 均 1999 安心・自信・希望をふくらませる子どもの居場所づくりを 子どもを守る, **547**, 1.
- 松浦幸子 1987 登校拒否児の居場所—ろば子屋学舎との出会いから— ソーシャルワーク研究, **12**(4), 220-226.
- 文部省初等中等教育局 1992 学校不適応対策調査研究協力者会議 登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して
- 内藤孝宏 2008 女子高生に居場所を! 渋谷の新しい「たまり場」(アゴラ百景) 週刊東洋経済, **6160**, 142-143.
- 中原陸美 1998 中高年脳卒中患者の障害受容と援助—リハビリ意欲と居場所との関係に着目して— 心理臨床学研究, **15**, 635-645.
- 中原陸美 2002 受診が著しい遅延した重症局所進行乳癌患者の心理社会的背景の検討—依存のあり方と居場所感をめぐって— 心理臨床学研究, **20**, 52-63.
- 中島明子 1993 子どもの居場所空間を考える 教育, **43**(4), 61-66.
- 中島喜代子 2003 中学生と大学生の比較からみた子どもの「居場所」 三重大学教育学部研究紀要, **54**, 125-136.
- 中島喜代子・倉田英理子 2004 家庭, 学校, 地域における子どもの居場所 三重大学教育学部研究紀要, **55**, 65-77.
- 中村泰子 1998 居場所イメージに関する検討—連想語の調査を通して— 日本心理学会大会発表論文集, 138.
- 中村泰子 1999 「居場所がある」と「居場所がない」との比較—〇△□法の基礎的研究として— 児童・家族相談所紀要, **16**, 13-22.
- 中西新太郎 2005 ポジションどり文化の生きづらさを越えて 生活指導, **612**, 42-49.
- 中西友美 2000 若い世代の母親の居場所感についての基礎研究 臨床教育心理学研究, **26**, 87-96.
- 中谷友香 2008 中学生における居場所感と精神的健康との関係 神戸大学発達科学部 平成19年度 卒業論文(未公開)
- 難波一夫 1993 「登校拒否」の子どものための居場所づくり—いま, 子どもたちが問にかけているもの— 教育, **43**(4), 49-60.
- 日本建築学会 2001 特集 子どもの居場所 建築雑誌, **116**, 9-41.
- 野村正樹 2002 サラリーマン出身作家が自らの体験を一挙公開「年間1600自分時間」を捻り出す技術(特集「自分の居場所」探し 今からできる「豊かさ倍増計画」 仕事と自分の居場所) プレジデント, **40**(16), 68-71.
- 則定百合子 2008a 青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科 平成19年度 博士論文(未公開)
- 則定百合子 2008b 青年期における心理的居場所感の発達の变化 カウンセリング研究, **41**, 64-72.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 2000 一般感情尺度の作成 心理学研究, **71**, 241-246.
- 奥地圭子 2006 フリースクールが求めてきたもの—東京シュール20周年を迎えて— 子どもの権利研究, **8**, 28-34.
- 小野 修 1994 不登校児の「心の居場所」と思いやり回復 児童心理, **48**(1), 23-28.
- 大久保智生・青柳 肇 2002 青年用適応感尺度作成の試み—居場所の視点から— 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 320.
- 大岡 玲 2002 男四三歳・出羽三山「山伏修行」記「二日間の荒行体験」その先に見えたもの(特集「自分の居場所」探し 今からできる「豊かさ倍増計画」「もう一人の自分」探し) プレジデント, **40**(16), 40-45.
- 大沢いずみ 1991 不登校児の援助における居場所活動 ソーシャルワーク研究, **17**, 221-225.
- 小沢一仁 1998 青年の居場所から見たアイデンティティ 日本青年心理学会第6回大会発表論文集, 31-32.
- 小沢一仁 2002 居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み 東京工業大学工学部紀要(人文・社会編), **25**, 30-40.
- 小沢一仁 2003 居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと 東京工業大学工学部紀要(人文・社会編), **26**, 64-75.
- 坂本昇一 1993 登校拒否のサインと心の居場所 小学館
- 三本松政之 2000 高齢者と居場所—新しい福祉のあり方—(現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ3—現代人の居場所—) 至文堂 193-203.
- 芹沢俊介 2000 居場所について 藤竹 暁(編) 現代のエスプリ別冊生活文化シリーズ3 現代人の居場所 至文堂
- 柴崎正行 2003 乳幼児は心の拠り所をどのように形成していくのか 発達, **24**, 2-4.
- 白井利明 1998a 学生は居場所をどうとらえているか—自己受容とセルフ・エスティームとの関連— 日本青年心理学会第6回大会発表論文集, 34-35.
- 白井利明 1998b 若者に居場所はあるのか 大学進学研究, **108**, 54-59.
- 杉本希映・庄司一子 2006 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, **54**, 289-299.
- 住田正樹 2003 子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田正樹・南 博文(編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 3-17.
- 住田正樹 2004 子ども居場所と臨床教育社会学 教育社会学研究, **74**, 93-109.
- 諏訪園隆夫 2002 ネット上に集い、旅自慢をするサラリーマンたち 大ブーム! 私が「一人旅」を選ぶ理由(特集「自分の居場所」探し 今からできる「豊かさ倍増計画」「もう一人の自分」探し) プレジデント, **40**(16), 46-49.
- 鈴木明美 2003 非行少年グループへのスクールカウンセラーの介入—学校での「居場所」作りを中心に— カウンセリング研究, **36**(4), 464-472.
- 鈴木智子・中野明徳 2000 学校空間と心の居場所 福島大学教育実践研究紀要, **39**, 55-62.

- 竹森元彦 1999 心の発達における居場所の役割 鳴門教育大学研究紀要, 14, 127-136.
- 田中治彦 2002 子ども・若者の「居場所」の構想 更正保護, 53, 6-11.
- 田中治彦 2006 子ども・若者の「居場所」の構想 子どもの権利研究, 8, 10-14.
- 田中麻貴・田嶋誠一 2004 中学校における居場所に関する研究 九州大学心理学研究, 5, 219-228.
- 寺崎正治・岸本洋一・古賀愛人 1992 多面的状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356.
- 徳田仁子 2004 スクールカウンセリングを通して生活環境を整える—不登校生徒の「居場所」さがし— 臨床心理学, 4, 213-217.
- 泊 真児・吉田富二雄 1999 プライベート空間の機能と感情及び場所利用との関係 社会心理学研究, 15, 77-89.
- 堤 雅雄 2002 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学), 36, 1-7.
- 都筑 学 1998a 青年心理学から見た「居場所」の問題 日本青年心理学会第6回大会発表論文集, 30-31.
- 都筑 学 1998b キャンパスにおける大学生の居場所—郊外型のマンモス私大における分析— 日本青年心理学会第6回大会発表論文集, 36-37.
- 上野ひろ美 1989 教室を「まなざしの範囲」にする 吉本均 (編) 新・教授学のすすめ「まなざし」で身に語りかける 明治図書
- 若山 隆 2001 こころとからだの在るところ—私たちの居場所の問題— 日本福祉大学研究紀要—現代と文化—, 105, 67-82.
- 矢幡久美子 2003 コラージュのなかの文字表現 居場所探しのテーマ 心理臨床学研究, 21, 450-461.
- 山本順彦 1996a 「こころの居場所」創造のための実践的教育学序説—デューイの「経験と教育」の理論からその指針を学ぶにあたって— 神戸親和女子大学児童教育学研究, 15, 52-70.
- 山本順彦 1996b 「こころの居場所」創造のための実践的教育学—デューイの「経験と教育」の理論に学ぶ— 神戸親和女子大学教育専攻科紀要, 1, 51-63.
- 山本順彦 1996c 「こころの居場所」創造のための実践的教育学(Ⅱ)—デューイの「経験と教育」の理論に学ぶ(2)— 神戸親和女子大学研究論業, 30, 181-203.
- 山本順彦 1997 「こころの居場所」創造のための実践的教育学(Ⅲ)—デューイの「経験と教育」の理論に学ぶ(3)— 神戸親和女子大学児童教育学研究, 16, 81-100.
- 山岡俊英 2002 大学生の居場所とセルフエスティームに関する一研究 佛光大学教育学部学会紀要, 1, 137-167.
- 山咲さくら・澤地 妙 2006 私の居場所はどこ? 中学校編—保健室で受けとめた子どものサイン 農文協
- 吉本 均・深澤悦子 1995 教育における「居場所」の思想と構造 神戸女子大学文学部紀要, 28, 27-43.